



主体性と関係性から考えるウェルビーイング ——NTTの研究アプローチ

AIの進展により社会や生活が変化する中、人のウェルビーイングを支えるには、人それぞれの価値観に基づく判断や人間関係を技術で置き換えるのではなく、主体性と多様な他者との関係性を豊かにする視点が重要です。本稿では、AI時代に人がよりよく生きるため、人や社会、技術のあり方を探究するウェルビーイング研究の考え方を紹介します。

キーワード：#ウェルビーイング、#主体性、#関係性

ふかやま あつし わたなべ じゅんじ
深山 篤 / 渡邊 淳司
おりめ よしのり なかじま よしあき
折目 吉範 / 中嶋 良彰

NTT 社会情報研究所

技術が進歩するほど、 「人」に戻って考える

AI（人工知能）の進展によって、私たちの働き方や学び方、情報との接し方は大きく変わりつつあります。文章作成や情報検索、分析に加え、複数の情報を整理して選択肢を示したり、対話を支援したりする技術も身近になってきました。これまで時間や専門性の制約によって難しかったことができるようになり、1人ひとりが得られる情報や選択肢も広がっています。

しかし、できることや選べることが増えること自体が、そのまま「よりよく生きる」ことにつながるわけではありません。これまで私たち人間は、さまざまな技術を手にしながらも、自分たち自身で判断し、他者とつながり協力して、現在に至る社会をかたちづくってきました。そのような私たちの本質的なあり方を、技術でよりよい方向に発展させていくにはどうしたらよいのかが問われています。

こうした時代に、技術の可能性を考える出発点として私たちが重視していることが、「主体性」「関係性」と、その結果として実現される「ウェルビーイング」です。主体性とは、自ら考え、自分にとって納得できる選択をし、行動することです。ここでの関係性とは単なる間柄ではなく、異なる経験や価値観を持つ人どうしが、それぞれの役割を持ち協働するという行動的な側面も含む強い結びつきを指します。そしてウェルビーイングは、個人の満足や幸福だけではなく、周囲の人々や社会との関係を含めて、よりよく生きるための考え方です。

本稿では、AIによって社会や生活の環境が変化する中で、なぜ主体性と関係性が重要になるのかを考え、NTTが取り組んできたウェルビーイング研究の考え方と、そこから広がる研究の方向性を紹介します。

「主体性」と「関係性」から 考えるウェルビーイング

人は、自分で考え、選び、行動する主体です。一方で、人は1人で生きているわけではありません。家族や友人、職場や地域の人々とのかわりの中で学び、支えられ、時には自分とは異なる考え方に出会いながら、価値観や生き方をかたちづくっていきます。

NTTのウェルビーイング研究は、このようなさまざまなかわりの中で育まれる人それぞれの価値観をとらえる1つの考え方として、I（自分自身）、We（身近な人との関係）、Society（より広い社会との関係）、Universe（さらに大きな存在との関係）という視点に立脚しています。自らのウェルビーイングを考える際には、自分自身がよい状態にあるだけでなく、自分とつながっている人々とのあり方や、社会の中でどのような役割を果たしているか、自然や文化とのつながりという観点も重要になります。

このように考えると、主体性とは、何でも1人で判断し行動することを意味しません。多様なかかわりの中で、必要な支えを知り、育まれた価値観に基づき複数の選択肢の中から選択することが、主体的に生きるために必要な力です。同様に、関係性のイメージも変わってきます。個人の考えを抑えて集団としての目的を追求することではなく、それぞれが身近な人々や社会などを大事に思う価値観に従って行動しながら、互いの違いを理解し受け入れることで、新たな価値を生み出していくことが重要となります。

個人の主体性と、他者との関係性（つながりや協働）は、相互に補完的な関係にあります。人が安心して自分の考えを表現できるような関係性があれば、新しいことに挑戦する主体性が発揮できます。1人ひとりが主体的に、集団やコミュニティに参加することで、多様な視点がもたらされ、協働的な関係性が促進されます。この相互作用を豊かにすることが、個人と社会の双方のウェルビーイングにつながると考えています。

AI時代で重要になる 「主体性」と「関係性」

AIは、情報を整理し、複数の可能性を提示し、これまで気付かなかった視点に出会うきっかけをつくるこ

とができます。これを、人に代わって答えを決めるためではなく、人が考え、選択するための材料を増やす手段として活用すれば、1人ひとりの主体性を支えられる可能性があります。

また、AIは人と人をつなぐためにも活用できます。異なる専門分野の言葉を整理したり、複数の意見の共通点や違いを分かりやすく示したり、1人では得にくかった知識や視点との接点をつくることによって、相互理解や協働を支援できます。重要なことは、技術そのものを主役にするのではなく、人の可能性や関係の選択肢を広げるために、どのように役立てるかという視点です。

例えば教育では、子ども1人ひとりの関心や理解に応じた情報を提示しながら、異なる考えを持つ仲間との対話につなげることで、仲間と主体的にかかわりを持つ態度や資質を獲得する機会をつくることができます。職場では、働く人それぞれの専門性や強み、価値観を踏まえた業務やコミュニケーションの支援により協働的な関係性を支えることができます。地域では、その人自身の関心を起点に活動や人との接点を広げ、多様な他者と協働することで、自分らしいかたちで社会とかかわることを支援できます。

このように考えると、AI時代に問われることは、AIが何をできるかだけではなく、人が何を大切に

し、どのように選び、誰とどのような関係を築いていくのか、その可能性を技術でいかに広げられるかが、これまで以上に重要になります。

NTT社会情報研究所の ウェルビーイング研究

NTT社会情報研究所では、このような問題意識のもと、人の主体性と関係性を起点にしたウェルビーイングの実践研究と、それを具体的な場面で支える技術研究を進めています。

1つは、人が自分らしく考え、選択し、多様な人々とともによりよく生きるために必要な資質・能力をとらえる実践研究です。その一例が「ウェルビーイング・コンピテンシー」に関する研究です。自己理解や主体的な選択、他者理解、協働、社会への働きかけのような力を、教育の中でどのように育むかを検討し、自治体と連携した実践にも取り組んでいます。自分の価値観を見つめ、他者の異なる考えに触れ、対話し、実際に行動して振り返るという経験を通じて、1人ひとりが自分と周囲のウェルビーイングを考える力を育むことをめざしています。

もう1つは、主体性や関係性を支える技術研究です。具体的には、異なる考えや価値観を持つ人どうしの相互理解と協働を支える技術、人が自ら考え判断することを支えるコ

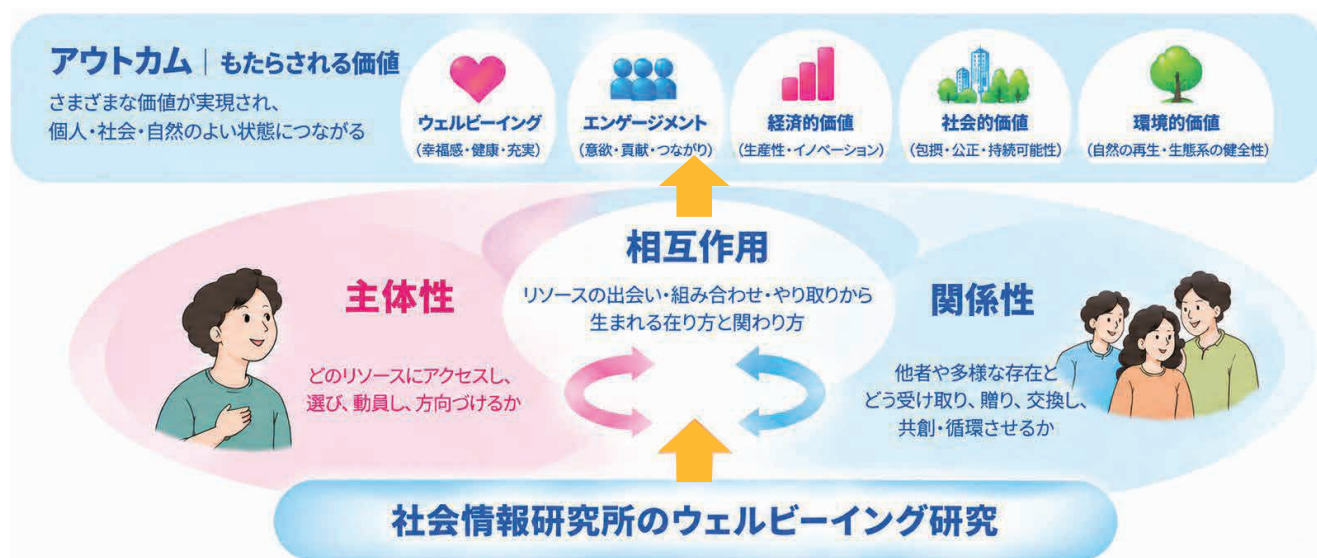


図 NTT社会情報研究所のウェルビーイング研究

コミュニケーション技術、1人ひとりが自身のウェルビーイングにかかわる価値観へ気付くことを支える情報生成技術などに取り組んでいます。

これらに共通することは、特定の価値観や答えを一方的に示すのではなく、本人の考えや関心を起点に、選択肢や気付き、他者との対話の機会を広げようとする考え方です。技術によって人の判断や関係を置き換えるのではなく、人がより主体的に考え、豊かな関係性に支えられる環境をつくることをめざしています。

このような主体性と関係性を育むウェルビーイング研究を通して、これからの時代をよりよく生きる教育の実現や、働き方がさらに多様化する職場でのエンゲージメントや生産性の向上、これからの地域のあり方にふさわしい社会課題解決の取り組みなどにつなげていきます(図)。

本特集の以降の記事では、このようなウェルビーイング研究の考え方や将来像を掘り下げるとともに、主体性や関係性を支える具体的な技術について紹介します。

人の「よりよく生きる」から未来を考える

技術が高度化するほど、私たちは「何ができるか」だけでなく、「何のために使うのか」を考える必要があります。その答えは、1つではありません。人によって大切にすることは異なり、地域や文化、置かれた状況によっても、望ましい選択は変わります。

だからこそ、1人ひとりが自分の価値観を見つめ、自ら選択できること、そして異なる人々が互いを理解し、協働できることが重要です。

NTTは、これまで培ってきたウェルビーイング研究を基盤に、人の主体性と関係性を支える技術を探究し、個人と社会の双方がよりよく生きられる未来に貢献していきます。



(左から) 深山 篤 / 渡邊 淳司 / 折目 吉範 / 中嶋 良彰

人々が豊かな関係性の中で自分らしい価値観を育み互いを受け入れ協働するウェルビーイングな人・社会のあり方を、AIによって如何に発展させることができるか、技術開発と幅広いパートナーとの実践を通して探究していきます。

◆問い合わせ先

NTT社会情報研究所
Well-being研究プロジェクト